

私説、

日本洞窟学会への歴史

前史 ～ 超人の時代 ～ 日本地下水生物研究会時代 ～ 日本ケイビング協会時代
～ 日本ケイビング・洞窟協会時代 ～ 日本洞窟学会時代 ～ 現在

水島 明夫 (MIZUSHIMA, Akio)

はじめに

2011年、Caving Journal No.43において(社)日本ケイビング協会という団体の設立を聞いた。

驚いた～。あの日本ケイビング協会が復活!?! しかし、何か違う。どうもあの日本ケイビング協会とは全く違うようだ。

そこで、私説シリーズの第3弾として、今まで誰も語らなかった、現在の日本洞窟学会に至るまでの経緯を書こうと思う。特に日本ケイビング協会から日本洞窟協会がなぜ分かれて、そして日本洞窟学会の名前で合併するまでの過程を。なにせ一時期、小生の洞窟活動のメインテーマがこの合併への運動でした。小生が先生と思う先達の方々を差し置いて書くことをお許しいただきたい。それより敬称を略して記述したが、非常に書きづらかった。また、事が事だけに、個人名を出さない時の一部不明確な文になることも、合わせてお許しいただきたい。歴史というのは見る人、角度によって全く違う事実になってしまう。あくまでも私説と言うことで、決して公式な見解ではないこともお許しいただきたい。

それでは・・・・・・・・・・。

前史

「洞窟は一人で入ってはいけない。」これはケイパー、スペレオロジストにとって不文律のような言葉。すると必然的に、洞窟に集団、グループで入ることになる。そこには人間関係が必ず生じることになり、今まで洞窟とは関係のない所で、様々な烏合集散が行われてきた。

当初は洞窟に入るための小さなグループだったものが、同じ地域を対象としているうちに、複数のグループが同じ地域で関係を持つようになる。やがて、その地域以外のケイパーが来るときにそのグループと新たに繋がることになり、集団がある地域から次第に広範囲になり、ついには全国へと広がっていく。

洞窟に入るというのは、ある面いろいろな所でいろいろな人と繋がることかもしれない。ま～、はやりの言葉で言えば“絆”を持つことかもしれない。

ところが、真剣に洞窟に取り組みば取り組みほど、自分の価値観との共有を他人に求めてしまう。そこにぽっかりと罅穴が空いている。価値観の共有は、ある程度はできても、全く同一になることは有り得ない。長年連れ添う夫婦だって難しいこと。もしそのような仲間を持てたら、それこそ素晴らしいことでしょう。たいていの場合はどこかで妥協点を見つけ、価値観の一部共有できらめざるを得ない。

しかし、この一部共有というのが難しい。性格と同じくらい人によって違う。また当然、洞窟にこだわ

ばこだわるほど、そのハードルは大きくなる。

と言うことで、この価値観のズレから、このちっぽけな島国で、そんなに穴の数も多くないのに、今まで様々なグループが生まれ、くっつき、離れ、現在に至るのである。

超人の時代

時は1920年代、大正から昭和への頃。日本にケイビングという言葉すらなく、洞窟は信仰、または恐怖の対象であった。そんな洞窟に入る人たちは、それぞれ超人的な好奇心と執念を持った人たちであろう。秋吉台の恵藤一郎、龍河洞の山内浩、洞窟生物の上野益三・鳥居元、動物化石の鹿間時夫ら。敬称を付けないのが恐ろしい。他にも日本各地の洞窟で、信仰と恐怖の対象から一步出て、ある人は天然記念物調査、ある人は観光化目的の調査で穴にもぐっている。これらの超人たちによって、日本のケイビングは始まったのである。

そして、この超人たちを、ある見方から並べると、次のようになる。山内>恵藤>上野・鳥居≧鹿間。お解りとは思いますが、ケイビングと学術の度合いである。純粋に“洞窟”を探検するケイビングもあれば、ある“学術的目的の場としての洞窟”に入ることもある。実は、この穴に入る目的の違いこそ、すでに価値観の違いなのである。

なお、この時代はやがて太平洋戦争の暗い世相の中